

アニメで知る心の世界

こもれば心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：空の青さを知る人よ

今回のテーマ

きょうだいトラウマとエディプスコンプレックス

はじめに

「空の青さを知る人よ」は、両親の突然の死という喪失体験に伴い、年の離れた姉妹であるあおいとあかねの関係が、本来の姉妹関係から親子関係（保護者と被保護者）へと変容していく物語である。この過程で生じた姉妹間の情緒的葛藤は抑圧されたまま、あおいは成長を続ける。

あおいが、高校 2 年生となり成人への移行期を迎えた中で、長年抑圧されてきた情緒的葛藤が再浮上する。この変化の過程で生じる心理的葛藤、特にあおいの内面に芽生えるあかねへの競争心、劣等感、そして罪悪感は、まさにきょうだいトラウマの典型的な症状として理解することができる。そこにあかねの元恋人である慎之介が帰郷し、今まで置き去りにしてきた様々な感情と向き合うことになる。

今回、きょうだいトラウマとエディプスコンプレックスという概念を通して本作品で描かれている、きょうだい関係の複雑さと、そこに生じる喪失からの離脱・再建の過程について考察していきたい。

今回のテーマ

I. きょうだいトラウマの理論

II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

III. 「しんの」の象徴的意味とエディプスコンプレックス

IV. 慎之介の喪失と都市での挫折

V. 三者それぞれの「再生」の物語

VI. まとめと「井の中の蛙」の多層的解釈

I. きょうだいトラウマの理論的背景

1) ジュリエット・ミッチェルの「きょうだいトラウマ」

ジュリエット・ミッチェルの「きょうだいトラウマ」は、きょうだい関係に固有の心理的構

造を明らかにした概念である。その中核には三つの特徴がある。第一に、きょうだいは「同じ家族の一員」でありながら「異なる個体」という同等性と差異の矛盾を内包し、この矛盾が根本的な不安定さを生む。第二に、心理的に「消去される」「愛情を失う」という排除の恐怖が存在する。これは物理的な死ではなく、関係性における存在価値の否定への深い不安である。第三に、愛する対象との競争という矛盾した感情の共存である。

ミッチェルはこの理解のため「母の法」概念を提唱した。ラカンの「父の法」が父-子の垂直的關係における言語と象徴秩序への参入を表すのに対し、「母の法」はより原初的な禁止を含む。新しいきょうだいが生まれると、幼い子どもは排除の恐怖から殺意を抱くが、母はこれを禁止する。この禁止が「母の法」の核心であり、限られた母の愛情を分かち合う水平的な社会関係の基盤となる。

「母の法」には明確な階層や言語化された規則はなく、共存と妥協、嫉妬と連帯が混在する言語化以前の次元である。きょうだいトラウマは、こうした水平的関係における平等と差異の葛藤から生じ、垂直的なエディプス的關係とは異なる心理的課題を提示している。

きょうだいトラウマが最も顕著に生じるのは、**2歳から4歳頃の幼児期**といわれる。

そしてこの物語は、両親の死によって抑圧されてきたきょうだいトラウマが、あおいの自立・独立を契機に再び湧き起こり、その情緒的課題を巡って展開される物語である。

Ⅱ. あおいの発達過程における退行と再挑戦

本作の姉妹関係は、両親の死を境に劇的な変容を遂げた。幼少期のあおいは、慎之介のバンド加入を夢見ることで、姉・あかねとのエディプス的三角関係において独自の居場所を確保しようとした。しかし、両親の死により慎之介は去り、姉妹は保護者と被保護者という親子関係のような二者関係を形成することになる。あかねが自己を犠牲にして完璧な母性を体現したことは、あおいの生存を支えた一方で、強烈な劣等感と罪悪感を植え付けたと考えられる。

この過程で、慎之介という理想的な男性像への感情や、あかねへの対抗意識・嫉妬心は抑圧・否認された。一方で、あおいは退行的な態度で抑圧された感情の一部を表現し、音楽への情熱という形で昇華したが、内面に蓄積され続けた。

高校2年生となり、かつての姉と同年齢に達したあおいは、抑圧していた葛藤を再燃させている。完璧な姉と比較されることで生じる対等な女性としての敗北感や、姉の人生を縛っているという罪悪感は、いつか愛情を失い排除されるのではないかという心理的消去への不安へと繋がっている。あおいが抱く東京への執着や秩父への閉塞感は、こうした内面的な自己否定や不安から逃れるための躁的防衛のようにも感じられる。

そのような中、町おこしのバックバンドとして金室慎之介が現れる。物憂げでジレンマを抱えた大人の男性になった慎之介の姿に、あおいとあかねは複雑な感情を抱く。同時に、高校生の姿をした生き霊ともいえるべき「しんの」があおいの練習する御堂に姿を現すのである。

「しんの」の存在は、両親を亡くしあかねが慎之介との上京を断念したあの日、三人が置き去りにせざるを得なかった情緒的葛藤が、時を超えて具現化した存在のようにも感じられる。

Ⅲ. 「しんの」の象徴的意味と三角関係の再構築

1) 「しんの」の心理学的機能

前々回「しんの」の出現のシーンをあつかった。若き日の慎之介「しんの」の出現は、あおいにとって重要な心理学的意義を持っている。まず、「しんの」は父親的存在の復活を意味し、あおいが幼い頃に心理的に排除せざるを得なかった憧れの対象であり、長年抑圧されてきた父親への愛情が再び表面化する契機となった。同時に、あおいにとっては自立と成長に向き合う象徴的存在でもある。

精神分析的な三角関係の構造（エディプスコンプレックス）で考えると、しんのは父的存在（憧れの対象、競争の対象）、あかねは母的存在（愛情と保護の源泉、同時に競争相手）、あおいは子どもの存在（エディプス葛藤を体験する主体）として位置づけられる。「しんの」は、あおいが長年回避してきたエディプス葛藤の核心部分を体現しており、真の心理的成熟を遂げるために避けて通れない課題そのものである。

また、「しんの」はあおいにとって安全な挑戦の場を提供している。現実の大人になった慎之介ではなく、過去から現れた「安全な」存在であるからこそ、あおいは心理的リスクを抑えながら感情を探求することができる。さらに、「しんの」への感情は、あおいが「保護される妹」から「大人の女性として愛する対象を持つ」という新たな発達段階への移行を象徴

している。この感情を受け入れ、向き合うことで、あおいはこれまで抑圧してきたあかねへのコンプレックスを認め、より統合された存在へと成長していく。そして重要なのは、「しんの」を媒介とすることで、あかねとの関係を維持しながらこの成長過程を経験できることである。

2) 三角関係の再構築

前回「しんの」とあおいの会話で、姉あかりや将来への葛藤をあおいが語っているシーンを扱った。「しんの」の出現により、一時的に健全な三角関係が復活することとなる。あおいにとって「しんの」への恋心は、単なる過去への憧れではなく、現在の慎之介への思いでもあった。あおいは「しんの」に告白する（千佳との会話で）ことで、これまで抑圧してきた慎之介への感情を表現し、競争者としての自分を受け入れ始めた。しかし同時に、この告白は逆説的にあかねと慎之介の関係を促進する意味も持っていた。

あかねにとっても慎之介の帰郷は、これまでの保護者としての立場から、一人の女性としての立場へと移行する契機となった。13 年前の思い出と現在の慎之介との再会を通じて、あかねは自分もまた恋愛感情を抱く一人の女性であることを再認識することになる。

3) 複雑な思いとの向き合いと「しんの」の緩衝的機能

あおいが「しんの」に惹かれることで生じる複雑な思いは、表面化しにくい微細な心理的葛藤として現れている。あおいは自分がしんのに恋心を抱くことで、長年自分を支え続けてくれたあかねに対して何となく申し訳ないような、説明しがたい複雑な感情を抱く。同時に、幼い頃に慎之介を心理的に排除してしまったことへの漠然とした思いも心の奥底に存在し、さらに現在の安全で安定した関係性に変化が生じることへの漠然とした不安も感じている。しかし、だからこそ「しんの」という存在が心理学的に重要な意味を持つ。もしあおいが現実の慎之介に直接恋心を抱いてしまえば、これらの微細な感情は強烈な葛藤として表面化し、あおいの心を深く苦しめることになったであろう。「しんの」は、このような直接的な葛藤を回避する巧妙な心理的緩衝装置として機能している。13 年前の人物であるため時間的距離による安全性が確保され、「過去への憧れ」という形で新しい感情を安全に体験することが可能となる。

そのようにして帰郷した慎之介、ならびに「しんの」との出会いは、あおいとあかねの抑圧されていた感情を再び掘り起こすことになる。しかし、大人になった慎之介自身もまた様々なジレンマを抱えており、あの時に失ったものへの思いを整理できずにいるように感じられる。

IV. 慎之介の喪失と都市での挫折

1) 理想化された記憶からの乖離

13 年前の慎之介（しんの）：

13 年前の慎之介（しんの）は、あおいとあかねの記憶の中で理想化された存在として保たれていた。音楽への純粋な情熱を持ち、キラキラと輝く青年として、二人の心の中に刻まれていたのである。特にあおいにとって、彼は憧れの対象であり、自分も同じような道を歩みたいという夢の源泉でもあった。

また、当時の慎之介は無限の可能性を秘めた希望の象徴として機能していた。東京での成功を夢見て旅立っていく彼の姿は、あかねにとっては共に歩むはずだった未来への憧憬を体現する人物であった。あかねもまた、現在のあおいと同様に秩父という限られた環境から脱出し、より広い世界で自分の可能性を試したいと願っていたのではないかと考えられる。しかし、両親の突然の死により、あおいを庇護する役割を果たさざるを得なくなり、その夢は断念せざるを得なくなった（それがあおいの罪悪感に繋がるのだが）。

13 年という歳月が過ぎ、現実の慎之介と再会することで、この理想化された記憶と現実との間に大きな乖離があることが明らかになる。記憶の中の輝かしい青年像と、目の前にいる物憂げで複雑な感情を抱えた大人の男性との間には、埋めがたい溝が存在していたのである。この乖離は、あかねにとっては自分が諦めた夢の現実を突きつけられる瞬間でもあり、あおいとあかねの複雑な感情の源泉となっている。

現在の慎之介の現実

一方、現在の慎之介は、音楽業界での厳しい現実と向き合った結果、深い疲弊を抱えた人物となっていた。かつて抱いていた純粋な音楽への情熱は、生活のための妥協や挫折によって曇らされ、理想と現実のギャップに苦悩する中年男性の姿がそこにはあった。13 年前の輝かしい青年は、物憂げで複雑な感情を抱えた大人へと変貌していたのである。

メジャーデビューの夢は叶わず、現在はバックミュージシャンとして生計を立てる日々。音楽で「天下を取る」という壮大な夢は遠い過去のものとなり、現実的な選択を重ねながら生きてきた彼の姿は、あおいが理想化している「東京で成功する音楽家」像とは程遠いものであった。

この 13 年前と現在の慎之介の対比は、時間の経過による必然的な変化でありながら、あ

おいとあかねにとっては「理想の喪失」として受け取られることとなったようにも考えられる。

音楽堂の裏手で誰もいないひっそりとした階段で腰をかけ、ギターを弾いていた。そこにあかねがやってきて二人の会話が始まる。その様子をあおいは遠目で眺めていた。

慎之介：俺、ここから東京に出れば、どんな夢も叶う気がしていた。(一呼吸おいて) でも、違うんだな。

あかね：夢、叶えたじゃない。ちゃんとギターを仕事にしてる。

慎之介：演歌歌手のお抱えのバックバンドなんて、やりたかった訳じゃねえよ。

あかね：けど

慎之介：不満があるわけじゃねえ。新渡戸（にとべ）さんには感謝しているよ。音楽に携わってるだけでも御の字だ。

しばし沈黙が続く

慎之介：でも…わざわざいろんなものを捨ててまで東京に出る必要があったのかは、わかんねえ。

あかね：じゃあ別の曲リクエストしていい？

慎之介：はぁ？（顔をしかめて言う）

あかね：——『空の青さを知る人よ』

慎之介：（赤面し、慌てふためき、手で口元を覆って言う）なんで……

あかね：ちゃんと買ったよ。しんののソロデビュー曲

慎之介：黒歴史だろ

あかね：『ガンダーラ』と同じくらい好きな歌なんだ

二人は、しばらくそのまま言葉を交わさなかった、風が側の木を揺らす。慎之介は無言のまま天を仰ぎ、大きく息を吸い、おもむろにギターを弾き始め『空の青さを知る人よ』を歌い始める。

～中略～

歌い終えたあと、おもむろに慎之介はいう

慎之介：やっぱ、なんかいいな……お前といると。落ち着くつつーか

あかね：え？

慎之介：俺、戻ってこようかな……別に、今の仕事で先があるってわけでもねえし。なんつーかさ、周りも、堅い仕事に就き出して、身を固めてさ。俺もいい加減、そういうとしなのかなって

その言葉に動揺し、駆け出しそうになるあおい、そこにすかさずあかねが言う

あかね：なーに言ってんの 今の時代、三十そこそこなんてまだ若造でしょ？落ち着くのはまだ早いっての。私はまだまだ諦めてないよ。いろんなことを。——これからだよ——うん、これからこれから！

慎之介：そっか

あかね：そうそう

慎之介：そうだな——うん

どちらともなく、二人は空を見上げた。